

中山靖子先生・著書出版プレ記念インタビュー vol.2

## 研究の集大成をまとめて 現代に伝える正統派ピアノ音楽

ピティナの副会長である中山靖子先生が、そのお仕事の集大成として著書を発表する運びとなりました。先生プロデュースの演奏会シリーズ「伝統と様式の研究」と連動して発行された「中山靖子の勉強帳」のエキスポ部分を、主に中級レベルの指導者の方々へわかりやすくご紹介するものです。(「中山靖子のピアノの本 ～現代に伝えるギーゼキング直系の正統派ピアノ音楽～」(仮題))

この編集を担当して頂いているピティナ正会員の砂原悟先生、金井玲子先生から中山先生にインタビューして頂きました。(前号に引き続き)

——先生は東京音楽学校(現東京藝大)在学中に(レオニード・)クロイツァー、そして昭和27年にご主人の中山悌一先生(声楽家)と共にドイツに赴かれ、ミュンヘン国立音大で(エリック・)テーンベルク、さらには(ワルター・)ギーゼキングの教えを受けられたのですね。

**中山** はい、その他ザルツブルクの夏季講習でヴィンフリート・ヴォルフという方に、また留学の最後の時期に少しプライベートで習ったのがヴォルフガング・ルーオフ、この方はリート伴奏をよくなさいました。

それぞれ個性も教授法も異なっていましたが、やはり共通して教えて下さった事は音楽の伝統に根ざした根本



▲テーンベルク教授と

の部分大切にする、という事、それ以外は先生の特性や好みでおっしゃる内容もヴァリエティがありました。例えばクロイツァーは音階のはじめの部分をちょっとルバートする、という癖がありました。他の先

生方はそういう事は好まれなかったようです。またミュンヘンで、テーンベルクが音校の新生へ



▲ザールブリュッケン音大のレッスン室で。周りの6人は聴講しているピアニストたち

のレッスンしているのを見学した時に、ファル(fall)とフィクス(fix)という事を説明していました。ファルは、音の群をひとまとまりにして手首の落ちる動きを利用すること、またフィクスはひじから先を固めるようにして弾く、その2つの区別を練習するために、バッハのインヴェンション第8番を使っていたようです。

テーンベルクは当事まだ40代で中堅のピアニストとしても活躍していました。いかにもドイツ人の男性らしい重厚な力強いタッチの線で音楽を描いていましたが、その素にあるのはやはり音楽を表現するという気持でしたから、上記のようなメカニックな事を生徒に言う場合でも、それがいかに音楽的に美しいのか、という事を生徒の心と感覚に実感させるようにしていたのです。

——ギーゼキングはよくノイエ・ザハリヒカイト(新即物主義)という言葉で説明されるのですが、実際に親し



▶▲中山先生の手書きの資料。これをもとに著書がつくられていく。



く教えを受けられた先生から見て、どのようなタッチをなさっていましたか？

**中山** そう、よくその言葉で説明されていて、それが多くの場合誤解を伴ってしまうのですが、即物主義という言葉のイメージから、味も素っ気も無い演奏か、と早合点してしまう方もいるのは残念です。楽譜に忠実に、という姿勢は決して紙の上を書いてあることだけを演奏する訳ではなく、その楽譜の中味まで読み取って音楽を表現するのです。その際余分な装飾、あるいは自分勝手なジェスチャーなどを付け加える事は避けるべきでしょう。

ギーゼキングのタッチの基本というのはやはり演奏前に身体の余分な緊張を解いて、弾く瞬間には指や腕の重みを充分に利用する事、まったく自然な法則に則ったもの



▲金井玲子先生(左)と砂原悟先生(右)のインタビューを受ける中山先生。

です。今はCDなどでも彼のすばらしい演奏を聴くことが出来ますが、残念ながらそのすばらしいタッチから生み出される豊穡な音、というものはCDではなかなか表現し切れない部分があってそれは残念です。彼の「沈める寺」(ドビュッシー)のあのフォルテと言ったら、それこそ全体重をかけて圧倒的な迫力で迫って来るものがあります、一度聴いたらちょっと忘れる事はできません。

奏法の中でもタッチの説明は難しいですね。それぞれの体格も違いますし、いくら言葉を尽くしても最終的には耳と心で感じて頂かなければ判りません。実際にタッチする瞬間だけでなく、その前後の事もなるべく噛み砕いてご説明するつもりではありますが、この本を書籍として読み下すのではなく、ぜひピアノの側に置いて実際にご自分のからだ、指、耳、心で体験しながら内容を実感して頂ければ幸いです。



▲1947年(昭22)日比谷でクロイツァー先生指揮、N響チャイコフスキーコンサート。  
▶「ぼんやの魂」(中山靖子著)数々の写真はこの著書から

